

実施日：令和6年9月14日(土) 天候：晴れ

参加者：49名 / お申込み人数：51名

行程：4.7km (午後から)

講師：清水昭博氏 (帝塚山大学 文学部教授、考古学研究所長)



飛鳥の考古学「渡来系氏族・東漢氏と檜隈寺」

帝塚山大学と古都飛鳥保存財団連携で、優しい歴史教室「飛鳥の考古学」を実施しました。午前中は座学講義 (明日香村中央公民館) で午後からはウォーキング (明日香村内臨地講座) です。

午前の講義は、帝塚山大学文学部教授の清水先生から東漢氏の講義がありました。

まずは、「飛鳥って今でこそ自然が多く日本の原風景とも言われる所ですが、飛鳥時代では日本で一番の都会だったんですよ」ってニュアンスでお話が始まりました。そうなんです。日本全体がまだまだ田舎だった頃、貴族や外国人が闊歩する大都会がこの地にあったのです。その外国人 (大陸からきた渡来人) を束ねたのが「東漢氏」、そして東漢氏は親子血縁での同族的な氏ではなく、色んな知識・技能を持った人達の集まりで、後に数十の氏に枝分かれし独立していったようなイメージをお話されました。蘇我氏の配下として興隆し、乙巳の変で蘇我氏の没落により挫折をしましたが、壬申の乱で奮戦し地位を回復・・・なんて飛鳥時代の歴史を物語る最高の脇役の氏だと思います。東漢氏の中で、特に後世有名な人物は、「坂上田村麻呂」。東北を平定した征夷大將軍で、京都の世界遺産として代表的な「清水寺」を建立したのも東漢氏の末裔「坂上田村麻呂」なのです。講義はその東漢氏の氏寺とも言われる「檜隈寺」の発掘や建ち並んでいた堂宇の伽藍配置説明および周辺の工房跡や住居跡などの発掘のお話がありました。そして清水先生お決まりの「瓦」講義があって午前の部は終了しました。

各自お弁当など食事を終え、午後からは明日香村内散策です。雨天を心配しながらも多少は雨で涼しくなることに期待していましたが、残念ながらとっても暑いウォーキングでした。

まずは、「定林寺跡」を見学。聖徳太子建立八寺に数えられると言いながら、実際は、渡来系の平田忌寸建立者説が有力とのこと。地形的な高まりに金堂や塔が並ぶ伽藍配置を思い描くような臨地説明がありました。「定林寺跡」の次は「高松塚古墳」。「高松塚古墳」はわたしも古都飛鳥保存財団が運営する「高松塚壁画館」に隣接しており、古都飛鳥保存財団の元学芸員の泉武氏の被葬者説を取り上げていただきました。「高松塚古墳」の次は本命の「檜隈寺跡」です。午前中の講義の内容を実際の足で辿り、目で確認し、再度詳しい臨地講義を頂き、本当に良く分かりました。礎石の中に一つだけ古墳の石室などを作る「凝灰岩」製のものがありました。石室を作る石と同じ場所から切り出して造られたものようです。あと、当時の伽藍配置では「門」は南にあるのが常識的と思われていたようですが、地形や氏族の生活した住居の関係で、門の位置は南と限らなかったことも教えていただきました。本当に貴重な講義頂き清水先生ありがとうございました。

それからご参加頂いた皆さま、暑い中お疲れ様でした。

